

人間の彼方

Original title: **Über Menschen** by Juli Zeh

© 2021 by Luchterhand Literaturverlag,  
a division of Penguin Random House Verlagsgruppe GmbH, München, Germany  
Published by arrangement through Meike Marx Literary Agency, Japan

この小説のエピソードと登場人物はすべて創作である。  
存命の人物に類似していても、それは偶然にすぎない。

目次

第1部 四角四面

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ショッピングセンター	バス	懐中電灯	植物カナッケン	R21D2	ゴミ分別のルール違反	グスタフ	ゴミの島	ゴート	ロベルト	ブラッケン
98	94	89	81	73	63	55	48	38	22	10

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	第2部	13	12
兵隊	アジサイ	クリッセ	ロツヘン	ホルスト・ヴェッセル	フランツイ	モンシエリ	シュテフェン	ブランデンブルク	ヨーヨー	「ドイツ <sup>A</sup> のため <sup>f</sup> の選択 <sup>D</sup> 肢」	ジャガイモの植え付け	トム	アクセスル
188	182	179	174	163	156	146	140	134	123	116		107	102

37	36	35	34	33	32	31
一角獣	春植えジャガイモ	脳腫瘍 <small>ラウムフォオルデルンゲ</small> による庄迫	プロクシユさん	父、娘	彫刻	ごきげんよう
285	275	266	259	252	243	238

第3部 腫瘍

30	29	28	27	26	25
人間の彼方	ナイフ	博物館	ザデイ	ペンキ	Eメール
228	223	215	204	197	192

訳者あとがき

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	
雨	プロクシュが死んだ	渋滞	パワー・フラワー	狩猟槽	シュッテ	お祭り	花咲く友情	フロイド	怒鳴り声	ピープス	プリン	肉の塊	
405	389	377	370	365	360	350	340	334	324	317	309	303	293





第1部 四角四面

〔原語は RECHTE WINKEL。「右  
翼の田舎」という意味もある〕

続けるのよ、なにも考えず。

ドーラはシャベルを地面に突き刺し、抜き取っては、強情な根っこを切り、砂まじりの地面の別場所へ向き直る。それからシャベルを投げ捨てて、両手を腰に当てる。背中が痛い。自分の歳を考える。三十六歳。二十五歳の誕生日以降、数えないと自分の年齢を思いだせない。

なにも考えず野良仕事を続ける。天地返しした地面が細い筋となって伸びている。お世辞にも成果が上があったとはいえない。見渡せば、焼け石に水だとよくわかる。土地はあまりに広い。もはやこれは「庭」ではない。庭といえは芝生になっていて、そこにガーデンハウスが建っているものだ。ドーラが育ったミュンスター〔ドイツ北西部にあるノルトライン・ヴェストファール州の都市〕の郊外では、そういうものと相場が決まっていた。最近まで住んでいたベルリン・クロイツベルク区なら、丸太の輪切りで囲んだミニチュア花壇のことだ。

いまドーラを取り巻いているのは庭ではない。かといって、庭園とも、農地ともいえない。ただの「土地」だ。実際、土地登記簿にもそう記されている。四千平方メートルの敷地は母屋と組になっている。サッカーグラウンドの半分近い広さの地面と古い家屋。荒れ放題の休耕地は土が固く、冬が終

わたつたのにまだ冬景色だ。植物学的破局。これをロマンチックなカントリーガーデン、つまり菜園に変えようと思いつなうて。

そういう計画だ。半径七十キロ圏内に知り合いもいなければ、母屋には家具もない。せめて自分で野菜を栽培しようと思いつたのだ。ドーラとしては、トマト、ニンジン、ジャガイモから毎日上来と言ってもらいたい。古い大農場管理官屋敷の衝動買い。修繕が必要。脂身のように大都市にへばりつく別荘地からは遠くかけ離れている。といっても気が触れたわけじゃない。人生という旅に当然の次なる一歩だ。カントリーガーデンを持てば、週末にベルリンから友人が遊びにくるだろう。生い茂る草むらで古い椅子にすわって、友人は嘆息するはずだ。「ここはなんて素敵なの」それまでに、誰が友だちかはつきりすればいいが。それよりもまず、お互いに行き来できるようにならなくては。

ガーデニング知識はゼロ。だけど、そんなことは問題にならない。そのためにユーチューブがある。幸運にも、ドーラは暖房機のメーカーを読み取るのに機械の構造まで知ろうとするタイプではない。なにごとにもこだわる完璧主義のロベルトとは違う。ドーラとの関係をドブに投げすて、黙示録に恋をしたロベルト。黙示録はライバルとしては格が上すぎる。黙示録には家来がついている。集団的運命への高度な対処という家来まで。とてもではないが、ついていけない。どうしてドーラが逃げなければならぬのか、ロベルトには理解不能だった。ロックダウンが原因ではないと言っても納得しなかった。ドーラが私物を持って階段を下りていくとき、頭がおかしいとでもいうようにドーラを見ているだけだった。

なにも考えずにただ続ける。インターネットから情報を得て、植え付け時期が四月にはじまること

はわかっていた。今年は冬が温暖だったから、もっと早くその時期が来るともいえる。いまは四月半ば。天地返しを急がなくては。二週間前、引越した直後に突然、雪が降った。今年最初で一回だけの降雪だった。大きな雪片が空から舞い落ちた。なんだか作ったような光景。自然の特殊効果。土地は一面うっすらと白くなり、ようやく清潔で静かになった。ドーラは深い静寂の瞬間を味わった。雪がないあいだ、土地は絶えず、なおざりにされ、荒れ放題にされてきたと訴えていた。いますぐすべてに秩序を、としつこく命令する声まで聞こえる。

ドーラは典型的な都会避難民とは違う。ここへ来たのは、オーガニックトマトを育てて、命の洗濯をするためではない。もちろん都会で暮らしていると、びしばしストレスがかかる。人でごった返す鉄道、路上のいかれた連中。職場である広告代理店での納期や会議、時間やライバルのプレッシャーがそこに加わる。だがそれも悪くはない。都会でのストレスは、それなりにうまく組織されているからだ。でもここ田舎は無政府状態もいいところだ。やることがいっぱいある。修理しなければいけないもの、うまく動かないもの、薄汚れ、荒れ果て、完璧に壊れ、至急必要なのにならないものだらけ。都会では物事はそこそこコントロールされている。都会というのは、もので溢れた世界のコントロールセンターだ。どんなものにも、最低一人は担当者がいる。ものが欲しければ手に入るし、いらなくなれば、持っていける場所がある。しかし田舎では、なにごとくも自分でしなければならず、そこに支配欲満点の自然が立ちほだかる。蔓を伸ばして、すべてを絡め取る。

クロウタドリが数羽飛んできて、天地返しした地面をつつき、ミミズを探している。一羽がシャベルの柄に止まった。あつかましいいったらない。ドーラの愛犬、メスの小型犬、ヨッヘン・デア・ロツ

ヘンが頭を上げた。冷え冷えする屋敷で夜を過ごしたヨッヘンはちょうどいま、春の太陽を浴びて、のんびりしていたところだ。しかし、あつかましい鳥が来たからには起きあがるほかない。翼を生やした田舎者に意見するのは都会育ちの矜持だ。それがすむと、またぞろ日当たりのいいポカポカの場所に戻って、後ろ脚を投げだし、腹ばいになる。エイにそっくりの恰好。だからヨッヘンにはそういう二つ目の名がある。

ドーラには、どこかで読んだ文言を思い出すと、それにこだわる癖がある。と言うか、文言が彼女に貼りついて離れない。ドーラの精神は、なかなかはがれないかさぶたのようにその文言をいじりまわす。熱力学第二法則という言葉も、そういうかさぶたのひとつだ。それをもじるところなる。秩序を回復するために多大なエネルギーを放出できないとき、無秩序はつねに最大の値を叩きだす。エントロピーだ。自分の土地を見まわすたびに、その言葉が脳裏をかすめる。いや、村全体、郡全体もそうだ。でこぼこの道、崩れかけた納屋や家畜小屋、蔦の絡まる廃業した飲み屋、休耕地に積みあげられたゴミの山、森の中の破けたゴミ袋。新しいフェンスで囲まれ、ペンキを塗ったばかりの家並みは、人間がエントロピーと悪戦苦闘している島と同じだ。ひとりひとりかばらばらにやっついては、数平方メートルの世界を維持するのがやっとだ。だがドーラにはその島すらない。よくて筏だ。納屋で見つけた錆びついたシャベルで武装して、エントロピーに立ち向かっている。

ドーラは六ヶ月前、今とはまったくちがった世界にいたとき、イーベイで売り物件を見つけ、グーグルでこの集落を検索した。ウィキペディアによるとこう書いてある。「ブラッケンはブランデンブルク州ブリグニッツ郡ブラウジッツ市ガイヴィッツ町にある集落で、元は廃村となったシュッテの一

部である。この集落は一一八四年、ジークフリート司教の古文書にはじめて言及されている。またスラヴ人が残した発掘品が出土していることから、ブラッケンはもともとスラヴ人の入植地だったと見られている」

まあ、旧東ドイツによくある街道沿いに生まれた集落だ。集落の中心は教会と広場で、そこにバス停と消防団と郵便ポストがある。住民は二百八十四人。ドーラが来て二百八十五人になった。といっても、住民登録はまだ済ませていない。コロナ禍のせいで役場の出先機関が閉まっていて、<sup>プブリクム</sup>公衆の転入転出は把握されていないという。ガイヴィッツ役場のホームページにはそう書いてあった。

ドーラは自分が<sup>プブリクム</sup>観客だとは知らなかった。役者は誰だろう？ 考えるな。こだわるな。いまは変な新造語が巷に溢れている。ソーシャル・ディスタンス、指数関数的成長。超過死亡率、飛沫感染防止ボード。そういう言葉についていけなくなつて数週間になる。いや、何ヶ月、何年も前からついていけてなかったかもしれない。だがコロナになって、「ついていけない」のが明白になった。新造語が頭のまわりを飛びまわっている。追いはらつても逃げないハエと同じだ。だから、そういう言葉と縁を切ることにしたのだ。新造語は知らない土地の知らない言葉だ。その代わりに手に入れたのが「ブラッケン」だ。といっても、この言葉にも違和感がある。<sup>プラッヘ</sup>休閑地と<sup>パトラッケ</sup>仮設小屋の合いの子みたいな響きだ。あるいは工事現場でやる不良品の<sup>プラッケン</sup>選別。

エン・トロ・ピー、エン・トロ・ピーと頭に響く。ドーラは戦いつづけると自分に言い聞かす。むりだと思つても、続けることならお手のものだ。広告代理店では続けることが日課だ。新しいデッドライン、新しいフィールド。人が少なすぎる。時間が無さすぎる。プレゼンテーションはうまく行く

こともあれば、失敗することもある。予算の獲得、予算の棚上げ。必要なはもつとデジタルな思考だ。全方位思考が求められる。ルーセル広告〔単体の広告に複数の画像〕、ラジオ版スポット広告、ソーシャルビデオ〔消費者とコミュニケーションを取ること、第一に考えるビデオ広告〕。S u s e y 社の創設者ズザンネが「月曜朝食会」という朝食にかこつけた二時間のミーティングで毎度口にする言葉だ。私たちはクリエイティブ・エクセレンスと独自のポジショニングで稼ぐ。依頼主をよく理解し、依頼主の問題を解決する手助けをして稼ぐ。「月曜朝食会」がなくなつて、むしろせいせいしている。「月曜朝食会」がなくなるなら、コロナが永遠につづいてもかまわない。

むりだと思いがら続けると、息が詰まることがある。皿にのっている腐ったものをむりやり喉に押し込むようなものだ。目と鼻を塞いでぐいっといく。シャベルを地面に突き刺す。エントロピー。エンで突き刺し、トロで踏みつけ、ピーで土を掘り返す。

ドーラは菜園にびつたりの場所を見つけていた。リング、洋ナシ、チェリーの花が綻びはじめている果樹のあいだだ。母屋から少し離れているが、台所の窓から眺めるのにちょうどいい。地面はほぼ平らで、その若木は土地の前面の若木ほど密生していない。若木の幹は親指くらいのも太さで、まるで格子垣のように見える。楓とニセアカシアだ。樹木の知識はある。ロベルトが大学で生物学を専攻していたこともあって、ティーアガルテン〔ベルリン、ミッテ区にある広い公園〕を散歩するたびに樹木のレクチャーを受けていた。樹木の育て方や増やし方。なにを考え、感じるかも。ドーラはそのレクチャーが好きで、それなりに習い覚えていた。ニセアカシアは外来種、渡来植物だ。急速にはびこつて、他の植物を駆逐する。といつても、ハチには人気だ。剪定バサミやノコギリで若木を伐採するとなると、数週間は

かかりそうだ。

菜園にしようとしているところにニセアカシアの茂みはないが、代わりにブラックベリーが繁茂している。もつといえ、前年の枯れた蔓だ。ドーラが移り住んだときには地面をほぼ覆いつくしていた。古い鎌はあるものの、ユーチューブのチュートリアルを参考にしてもうまく研げない。刃がなまくらでは、マチェテ〔中南米で使われる山刀〕でジャングルの道なき道を行くのと変わらなかった。体の芯まで凍える最初の夜を過ごしたあと、ドーラは冬着を着込んで外に出た。長袖の木綿の下着、厚手のスウェットシャツ、綿入りのジャケット。十五分後、玉ねぎの皮をむくように一枚一枚脱いだ。脱いだ服の山の横に下着だけで立った。それからはTシャツ姿で玄関を出るようになった。朝がどんなに冷え込んでも平気だった。朝の空気は清々しい。鳥肌が立つのも心地よい。屋内は冷え冷えしているが、外気温は日が高くなるにつれ、二十度近くまで上がるようになった。新しい住まいに引っ越してから、夜中にドーラの毛布にもぐり込んでばかりいるヨッヘンも大喜びだ。ヨッヘンは日中、一番ポカポカしている日溜まりを探して庭をうろつく。動く小型太陽光パネルといったところだ。

復活祭はひっそりと終わった。ロックダウンがいろいろなことを変えた。平日と休日に差がなくなった。作業が終わると、果樹のあいだに十メートル掛ける十五メートルの耕地ができ、境界に紐を張った。四隅はきれいな直角だ。赤い紐があると、新しい耕地がプロはだしに見える。これでもうできても同然だ。

だがそれはとんだ勘違いだった。ここ数日、ドーラは紐に沿ってシャベルを突き刺し、芝土の塊を取り除いている。といっても、それは芝と呼べる代物ではない。「雑草の根っこ」と言ったほうがい



い。根っこは地中にはびこり、シャベルの刃に何度も両脚で跳び乗らないと、切れないほどだ。骨の折れる作業であり、問題のはじまりだった。本当の難敵は地面のもう少し深いところにあったからだ。残留品だ。エントロピーに挑む者がいるなどと誰も思わなかったようだ。旧東ドイツ時代に誰がこの古い大農場管理官屋敷に住んでいたか知らないが、ゴミというゴミを平気で庭に捨てような輩だった。レンガの破片、錆びた金属片、古いプラスチックのバケツ、割れたガラス瓶、靴の片割れ、錆びついた鍋。子どものおもちやもあった。色とりどりの砂遊び道具、おもちやの車の車輪。人形の頭部が地面の中からこっちを見上げていることもあった。ドーラは発掘品を畑の縁に集め、それが耕した地面の縁取りになった。

ドーラはシャベルを地面に刺して、握りに寄りかかった。手足にゆっくり力が戻ってくる。二週間の田舎暮らしで、両手には赤切れやタコができていた。ドーラは掌と手の甲を見た。体の一部とは思えない。両手は昔から特大だった。ドーラはときおり、自分の手がいうことを利かないのではないかと不安になることがある。背後に大きな人間がいて、そいつが袖を通してドーラの腕を動かしている。図が脳裏に浮かぶのだ。昔は兄のアクセルにもずいぶんからかわれた。「ドーラのヒレ！」と兄に言われてはかっかしたものだ。母が亡くなるまでそんなことが続いた。その後はお互いに干渉しなくなり、やさしくするようになった。なにもかも、そう、ドーラの大きな手までが壊れやすいガラスになったかのように。

ロベルトはドーラの手が好きだといつも言っていた。むろんドーラのが好きなあいだけだったが。その後、ドーラは二酸化炭素排出の問題児となり、ついには潜在的なコロナウイルス培養器に

なりはてた。

ドーラは経験から休みすぎてはいけないとわかっていた。長く休みすぎると、やる意味があるのか疑問を持ちはじめてしまうものだ。ちょうど二週間前に開墾に着手し、三日前から天地返しに精をだしてきた。できあがった幅はおよそ一メートル半。それでも予定の六分の一も達成していない。この調子だと種芋の植え付けは五月半ばになってしまう。困るのは、それでも困らないことだ。いざとなれば野菜はスーパーで買える。しかも水やりのコストを考えると、庭で育てるよりも安上がりかもしれない。ロックダウンは困りものだが、自分でジャガイモを育てるほかないほど深刻ではない。菜園をはじめ理由などそもそももなかった。カントリーハウス・ロマンチックを満喫し、訪ねてくる友だちのためでもあったが、カントリーハウス・ロマンチックなどじつは性に合わないし、友だちもない。ベルリンでは、友だちがいなくても目立ちほしなかった。そもそも友だちなんていたら、仕事の時間が減ってしまうし、ロベルトのほうに充分友だちがいた。だがここ田舎では、友だちの存在がないことは地平線で鈍く轟く雷と同じだ。

いきなりこんな広い菜園にするなんてどうかしている。典型的な初歩的過ちだ。百五十平方メートルのはずが、十五平方メートル止まり。まあ、入門編としては充分だ。しかしせっかくきれいに張った境界の紐を立て直す気にはなれない。それにこの数年、はじめたプロジェクトは必ず最後までやり遂げてきた。それがどんなに馬鹿げたプロジェクトでも。毎日考えを変え、新しいバリエーションを求め、矛盾したことをいい、上司が恐くて決断できない、そういう依頼主を相手にしてきた。土いじりよりもずっと厄介だ。続ける。菜園も作れないようなら、なんでこの家を買ったのかわからなくな

る。

去年の秋に新型コロナウイルスが押し寄せることを予感していたと言い張れるなら楽だ。田舎の家はパンデミックが収束するまでの避難場所だと。でもその時点では、なんの予感もなかった。ドーラがインターネットで不動産を物色したところは、気候変動と右翼ポピュリズムが喫緊の問題だと思われていた。十二月にベルリン・シャルロットンブルク区の公証人を内緒で訪ねたとき、コロナはアジアで起きているなにかで、ネットニュースの見出しをはるか下までスクロールしなければ見つからないほどだった。母親のささやかな遺産と貯金を合わせて頭金を振り込んだとき、本気で田舎に引っ込みたいのか、自分でもまだよくわかっていなかった。それでも家が欲しかった。それも大至急。ただの思いつき。メンタルなサバイバルテクニクとして。暫定的な人生の非常口として。

ここ数年、人は郊外に家を構えるものだ、とことあるごとに聞かされていた。主に別荘として。ドーラはプロジェクトのループから逃れたい一心でそうした。ドーラの知り合いはみな、そういうループに慣れきっている。プロジェクトをひとつ仕上げると、すぐ次のプロジェクトがはじまる。はじめのうちは、現在進行中のプロジェクトこそ世界で一番重要だ、完遂するためなんでもしようと思う。だが終了してみれば、すべての意味が崩壊し、同時に次のもつと重要なプロジェクトがはじまる。終わりはない。厳密には継続ですらない。ただのループ。みんな、立ち止まるのが恐くて走っているだけだ。でも無意味だと、ほとんどの者がうすうす勘づいている。ただそれを口にしたくないだけだ。同僚の目、深いところで怯えているその目から、それが読み取れる。「それ」をやれると信じているのは新人くらいのものだ。けれども「それ」はやり遂げられない。「それ」というのは考え

得るすべてのプロジェクトの総体で、次なるプロジェクトを依頼されることなく、依頼されなくなることもそれが最大の破局だからだ。「それ」をやり抜くのは、現代の生活世界と労働世界の基本だ。だけど集団的自己欺瞞はすでに音もなく、はじけている。

そういう認識が都会の地下鉄に浸透し、あらゆるコーヒーマシン、あらゆるエスカレーター、高層ビルのあらゆる階を密かに席卷するようになると、人はバーンアウトする。同時に車輪の回転はどんどん加速する。もっと速く走れば無意味な駆け足から抜けだせるとでもいうように。

そこから抜けだすのは可能だ。ドーラはいつもそうしてきた。プロジェクトのループに決して抗わず、時代にマッチしたライフモデルとして受け入れればいい。だがなにかが変わった。ドーラではない。まわりが変わったのだ。ドーラはついていけなくなった。そして郊外に家を構えるというアイデアが、みんなについていけなくなった者に居場所を与えた。去年の秋のことだ。そしていまブラッケアの荒れ果てた土地にいて、不安に苛まれている。プロジェクトのループが軌道はずれそう。敷地を見たとき、そう自覚した。その敷地はドーラの新たな呪うべきプロジェクトになった。しかも今回は手に余りそう。

気に染まないが、作業を続けるのをやめることにした。三十分間なにもしないことを自分に課す。ドーラはシャベルから手を放すと、前年のイラクサをかき分けて母屋へ歩いていった。菩提樹の木陰に屋外家具が並べてある。ガタがきているが、納屋で将来の田舎暮らしで使えそうなほかのものと一緒に見つけたものだ。不動産会社はなんて言っていたっけ？「牧歌的なのは、そうなるよう快適にしたときです」この地域で空き家を急いで売るときの謳い文句だ。

ドーラは椅子に腰を下ろし、足を伸ばす。予定でいっぱいの日々にヨガのレッスンや瞑想の時間をむりやり放り込んで、人生を減速しようとするプレントラウアーベルク区の間人と同じで、間抜けもいいところだ。プロジェクトのループはワナだ。容易には抜けだせないことはわかっている。脱プロジェクト化の試みさえも、新たなプロジェクトに変えてしまう。そうでなければ数百万もの犠牲者を出さずはない。ドーラは腹式呼吸をして、問題は別のところにある、と自分に言い聞かせた。問題はプロジェクトではなくて、ロベルトだ。なにかがあつて、ついていけなくなつた。